

---

**真里** : Yang

Theo

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真里：Yang

### 【Nコード】

N7688Y

### 【作者名】

Theo

### 【あらすじ】

まっすぐ過ぎててちょっと理屈っぽくて不器用な、真里という女の子の青春記です。

第一部は、ボーイ・ミーツ・ガールな恋愛小説・・・です。

真里が大決心して関西から上京して、出会った男の子とは？

Prologue : ヨウ

目次

Prologue : ヨウ

1 . 真里 : 神社、vision

2 . 出会い : 一ツ橋

3 . Three is company : 二重橋

4 . 深まり : 三軒茶屋

5 . 初めての : 四谷舟町

6 . 約束 : 孀恋 (1)

7 . 夜半の語らい : 孀恋 (2)

8 . Opposite poles? : 五反田

9 . ガール・トーク : 西宮神社

10 . 最後の誘惑 : 六本木・新小岩

11 . 二つの敗北 : 水道橋 ・ 御茶ノ水

12 . 二つの挨拶：孀恋（3）

Epilogue： 雲の居るところ

Prologue： ヨウ

ヨウは、車いすをこぎながら、短い通路の先にあるはずの微かな蒼穹を思い描いた。今日は晴れだったな。梅雨入り前の、太陽の最後の悪あがきのような晴れ。夕映えも拝めるだろう。だが、オレが今年の梅雨を見ることは無い。

違う：「逃げ」なんかじゃない。馬鹿にされようが、コケにされようが、「敵」に勝つ、最後に残された手段だ。

ドアから差し込む明かりが通路にくつきりと見える。向き合う時が迫っている。ヨウは決着の場所となる屋上に出る時、真里と教会に行った際の奇妙なフレーズを思い出した：その「目」とやら、これからのオレの闘いもきちんと見んのかな？

バリアフリーで出入りできるようになっている病院の屋上は、扉が開いていた。ヨウは人の気配を探った。出てすぐ右の喫煙コーナーにも人がおらず、屋上は全くの無人であった。ヨウは心底安堵した。14階建ての屋上であり、風が強い。都心の薄臭い、見えない

チリに満ちた空気が顔に吹き付ける。ヨウは、不快気に目を細めた。見渡すと、病院だから当然の配慮だろう、金属製の高い網フェンスがぐるりを取り囲んでいる。喫煙コーナーの周りの、申しわけ程度の植木。植木って、タールの発がん性弱めんのかっつーの。

足元は、ザラザラした四角いコンクリートのパネルが貼り合わせられ、細くふちどる溝には黒い土の粒が細かく踊っていた。遠方に、エアコンだかのベージュの空気抗が幾つも整然と並ぶ。呼吸器官。左にはアルミの物干し台がやはり規則的に並ぶ。暮れ方というのに、まだ洗濯物が垂れ下がり風に揺れている。間もなく取り込むつもりか。白いシャツや白衣や薄い色合いの服だから、病院関係のものだ。ヨウは車イスを走らせ、そちらに向かった。適当な物干し台のもとで、ヨウは、果物ナイフを腰まわりのあたりから取り出して軽くほるるように置き、その横に車イスからズリ落ちるように降りた。そしてナイフを拾い上げ、物干し台を背に片膝を曲げた体勢をとった。早くしなければ。見つかる。や、焦るな。時は来る。待つんだ。

ヨウは南のほうを眺めた。フェンスを透かして、高ささままちの高層ビルが幾棟かそびえ、不規則な模様の、オフィスルームの白い小さな明かり。外壁に等間隔に点滅する赤いランプ。建造物なんかじゃねー：直方体の夢の掃き溜め。

その遙か上空には、夕陽によって荘厳なサーモン・ピンク色を全体に帯び、空いっぱい翼を広げた鳥の形の雲が、十日余りの白い月を呑み込むかのようにして、東に向かって飛んでいる。ヨウはその鳥に見入った。あの朱雀はいい。夕焼けがこんなピンクっぽい色になるって一生の最期に初めて知った。

東は？東は、雲一つない、ブルーグレーの夕方独特の空。虚無の色って、案外、ああいう色かもな。反対へ首を巡らすと、名残り程度は地平線上にあるかもしれないが、この高みのこの位置からは太陽はもはや見えない。西の中空にたなびく、薄紫の雲の腹は淡いピンク・オレンジの彩りに染まる。

ヨウはもう一度、南天にまなこをやった。そして、月を喰らう朱雀に見入った。朱雀ってゆうけど、まんまだな。あれが見納め。月なんぞ、食われちまえ。あの空に泳ぐ火の鳥のように、オレも蘇ることあんのか？もう一度戦いたい。きつと、また。こういうの、昔の人っぽい・・・ヤベー。時間の感覚、狂ってる。何秒眺めたか、何分眺めたか、もうわかんね。マズかったか？しかし、危ういほどには眺めてない。どこに根拠があるのかわからないけど。勝利は、疑う余地がない。

ヨウは目を落とした。ナイフの刃には、リンゴの薄黄色の濁った果汁が少し残っていた。どうせすぐもつと、と思いつつ、パジャマの上着のすそで、片面ずつ丁寧に汁を拭き落とした。人の形のマークのあるドイツ製の小さな凶器は、神仏を含む全てが黄昏れゆく光景にあつて、新たなやりがいを見出し、小さくとも気高く鈍く輝く魂をあらわにした。

ゆっくりと目を閉じ、ナイフを首に当てた。この刃渡りでは、この方法しか。

目を閉じたため、他の感覚が研ぎすまされる。風のアたる音、触感。かすかにクルマ？の音。もう、なんの関わりも意義も持たない空気の振動が、一時たゆたって減衰する。だが、首のナイフの感覚は無音でも雄弁であつた。

ヨウは深呼吸した。だが、息は整えるまでもなかつた。震えも動悸も動揺もなかつた。

ためらいはない。ためらい傷なんかつけない。オレはボクサー、痛みなど怖くない。オレの左。オレの左なら。

いよいよとなつて、純粹な力がヨウの身体の芯から勃然と湧き起こつた。神経の内・外から、力は、左肩から左腕、左手、その全指先を光の速さで走り満たした。比類ない孤独な自信が、天に舞い上がる孤独な精神を支える。そして、いつだか聞いた言葉を思い出した。オレハ、征服サレナイ太陽。

と同時に、耳をビヨウとなぜる強い風を受け、頭上で鳥の群れが

飛び立つような、大きくはためく音がした――合図！

ヨウは小さく雄々しくヤツと気迫を込め、渾身の力でナイフを押し当て手前に引いた。刃は頸動脈に達し、致命的に切断した。切り傷とは思えない、熱いものに触った時の焼ける痛みが、瞬時にヨウの意識を支配した。玄妙な赤銅の輝きの陽光が、無の向こうから一気に迫ってきて、視界360度をあまねく満たす。ヨウは勝利を確信した。意識はすぐに途絶え、首から鮮血を吹き出しながら、身体はドオツと横倒しになった。

数分後、血まみれとなったヨウの姿を、洗濯物を取り込みに来た病院のワーカーが発見した。ヨウは絶命していた。血しぶきは、白い洗濯物にプロミネンスのような模様を描いていた……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7688y/>

---

真里：Yang

2011年11月22日23時53分発行